［原著論文］

「感性」と「身体的体験」

久保正秋＊1

The Japanese sensibility（*kansei*）and The physical experience

by

Masaaki Kubo

Abstract

The purpose of this study is to examine the meaning of the Japanese sensibility（*kansei*）and argue an enlightening essay about a contradiction between the Japanese sensibility（*kansei*）and the physical experience. And this study discussed about the *Kansei*（the Japanese sensibility）that is native esthetic sense of Japan. The results of this examination were as follows.

The *Kansei* is not a connection of the rational faculty in human beings in the society. The *Kansei* is the capacity to concern with one's own body in the world. The physical experiences give birth to connect with one's own body based on the *Kansei*. The fusion of human beings and the world（eco-system）is based on the *Kansei*.

The physical experience may be the effective learning method for taking the *Kansei*. However, in the social system the rational faculty is most important. Therefore the capacity to concern with one's own brain in the society is effective, remarkably intelligent human beings can not appreciate the *Kansei* based on the physical experience.

1. 感性を教育するとはどういうことか

あのひとは「感性豊か」だ，というような言い方がされることがある。しかしよく考えてみると，それは一体どういうことか，解らない事が多い。そういう場合は，その反対を考えてみるとよい。感性貧乏というようなひとを想像してみよう。思い当たるような人間像が浮かんでくるだろう。私のイメージでは「モノ・カネを追い求めるひと」「何でも数字で解決しようとするひと」「勝負や地位，名誉にこだわるひと」である。これは私だけのイメージではないだろう。少なくともこのようなひとたちを感性豊かと言うようなことはない。モノ，カネ，数字，勝利，地位，名誉，これらを

＊1　東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

追い求め，こだわるひとは感性とは縁遠いと考えられるだろう。しかしこれらのものは社会において必要とされるモノなのである。

社会とは人間によってつくられるものであり，教育はその社会において必要とされるモノを有効に利用することを教える。モノの作り方や扱い方，カネの儲け方や増やし方，数字の意味や利用法，勝利の重要性や地位の有用性，名誉の必要性など。「ヒト」はこれらのモノを身につけ，「人間」になっていくのである。いわゆる「社会化」である。しかしながら，教育によってこれらモノを身につけ，それを有効に利用すればするほど，感性貧乏になる可能性が高まっていくのである。

感性教育と言われる領域がある。例えば2008年以前の幼稚園教育要領における第1章総則，2幼稚園教育の目標には「多様な体験を通じて豊かな感性を育て，創造性を豊かにするようにすること」とある[1)]。あるいは最近では，中央教育審議会初等中等教育分科会の審議において，育成すべき資質・能力について「人として他者と支え合ってより良く生きるための思いやりや優しさ，感性など豊かな人間性に関する普遍的な教育についても，重視する必要がある」と述べられ[2)]，感性教育の重要性が謳われている。しかしながら，先に述べたように教育は個人の社会化，即ち「集団や社会の成員として適合的な行動様式を習得（広辞苑）」することを目指すのであって，その「社会の成員として適合的な行動様式」と「感性豊かな行動様式」とが相矛盾することもあり得るのである。

本稿では，感性とは一体，何であるのかを「世界」という観点から考察し，そしてその感性と教育との矛盾点を哲学で用いられるエッセイという手法で綴って行くこととする。

2. 桑子の感性

まず，感性についてのひとつの考え方を紹介しよう。感性を育むというような題目の書籍は数多くあり，そこには感性について様々なことが書かれているが，その多くが解ったようでよく解らないものである。ここでは桑子敏雄という哲学者の感性の定義を基にして感性を考えていく。

桑子は感性を「世界のなかで自己の配置を感じる能力」，「世界と自己との相関を感知する能力」としている[3)]。ここで注意するのは社会ではなく「世界」と言っているところである。社会は人間が集まって作りあげたものであるが，人間は社会の中だけに生きているのではない。

桑子が言うように「人間は身体をもつもの，身体的存在」[4)] であり，私たちは「身体システム」

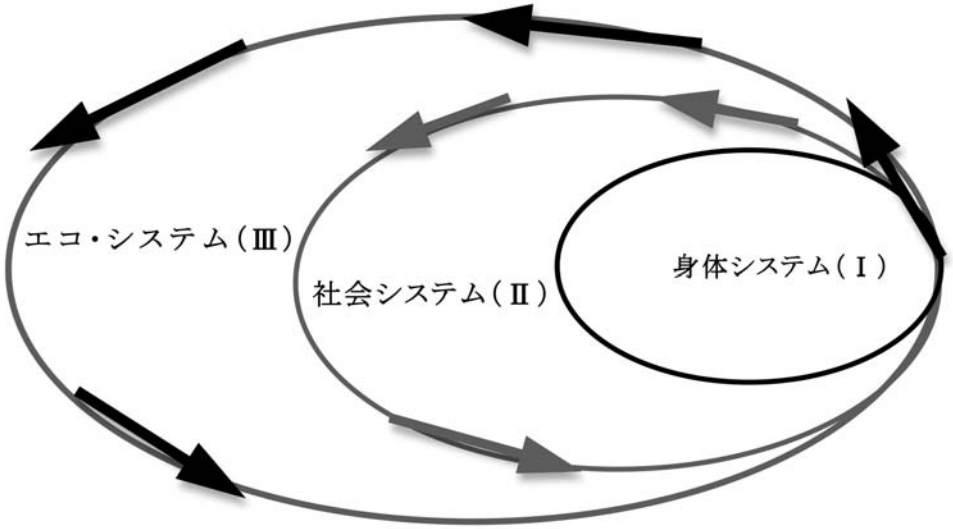


図　三重のシステム

として生きている。つまり人間は息をし，脈を打つというような生理的なシステムを有した身体として存在している。これが「身体システム」である。そして同時に，このような人間たちによって作られた「社会システム」の中で生きている。しかし，それだけではない。人間は，人間たちが作ったものではない環境システム，川，海，山，空，花，草木，生き物を含む「エコ・システム」の中にも生きているのである。

この「身体システム」「社会システム」「エコ・システム」とは，ベイトソンの三重のサイバネティックモデルに基づいた亀山の理論を用い，著者が修正した三重のシステムである。ベイトソンが示した「個々の人間」「社会システム」「生態システム」[5] を亀山は，「個のシステム（Ⅰ）」，それから形成される「社会システム（Ⅱ）」，それらを包摂する「エコ・システム（Ⅲ）」とした[6]。今回の研究では，これらの論議を踏まえた上で，人間が生理的なシステムを有した「身体的存在」であるが故に，「個のシステム」を「身体システム」と言い換えることにした。「社会システム」とは，人間によって自然発生的に，あるいは人為的に作られた，家族，会社，国家などのシステムである。「エコ・システム」のエコは，環境あるいは生態と訳される言葉であり，人間を含めた生物，全ての物質，地球，宇宙をも含めたシステムを意味する（前ページ図，参照）。

先に述べたように感性とは「世界」（世界であって社会ではない）の中での自己の位置づけ，あるいは「世界」との関係を感じる能力であった。桑子は感性を「複雑な現象に満ちる環境世界にかかわる能力」として捉え，「身体的自己とその環境との相関に関する把握能力」であるとしている[7]。桑子が言うように，人間は身体的存在であり，身体をもって空間の内に存在している[8]。桑子は，その空間を環境と言い換え，「感性とは身体と環境の不可分なかかわりを捉えることでもある」[9] と述べている。このように考えると，この桑子の定義における「世界」とは「エコ（環境）・システム」と言い換えることでき，感性とは，「身体システム」として生きている人間の，その「世界（エコ・システム）」の中での他の事物（他者・動物・生き物・植物・モノ）とのかかわり方として考えることができる。

例えば「好む」と「愛でる（めでる）」という，他の事物とのかかわり方を意味した言葉がある。「好む」は辞書をひいてみると「数ある対象物の中から性分に合うものを選びとって味わう」とある（広辞苑第六版）。「愛でる」は「かわいがる。いとおしむ。愛する」，さらに「ほめる。感嘆する。賞美する」とある（広辞苑第六版）。「好む」は「あの人は好みのタイプだ」「甘いものを好む」というような使い方，「愛でる」は「孫を愛でる」「桜を愛でる」というような使い方がなされる。このふたつの言葉を比較してみるとかかわり方の違いが見えてくる。「好む」は理性によって対象を客観的に判断し，合理的に選択するようなかかわり方である。このような理性を中心としたかかわり方は「社会システム」の中で多く見られる。

桑子が述べるように感性は，西洋の理性的認識を基準として考えられてきた。それ故に，「感性は理性に従属する能力，理性に材料を提供し，また理性から指令を受ける能力として下位に位置づけられてきた」[10] のである。よって感性は，広辞苑にあるように「①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性」「②感覚によってよび起こされ，それに支配される体験内容。従って，感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む」ものであり，それらは「③理性・意志によって制御されるべき感覚的欲求」，あるいは「④思惟（悟性的認識）の素材となる感覚的認識」に位置づけられる（広辞苑第六版）。よって「感覚的欲求，認識」は，「数ある対象物の中から性分に合うものを選びとる」というように，理性によってコントロールされ，「好む」のように客観的，合理的なかかわり方になるのである。

それに対して「孫を愛でる」「桜を愛でる」というようなかかわり方は理性によって対象を客観的，合理的に判別するような関わりではない。主観的，非合理的であるが，感性を中心としたかかわり方として考えることができる。「孫を愛でる」「桜を愛でる」は理性によってコントロールされた感情ではなく，それは「身（み）」から湧き上がる「感覚的欲求，認識」そのものに基づいたか

かわり方なのである。このような感性を中心としたかかわり方は「世界（エコ・システム）」の中で多く見られる。例えば，海や山，あるいは花や樹木に対して感じるなんとも言えない愛着感は，理性によってコントロールされたものではない。このように「愛でる」は，「世界（エコ・システム）」の中でのかかわり方を意味する言葉であり，理性ではなく，人間全体として，つまり「身（み）をもって」関わることのように考えられる。感性は「sensibility」の訳語として誕生した言葉であるが，先の辞書的定義のように，理性によって制御され，悟性の素材となる単なる感覚なのではない[11)]。よって感性とは，桑子に従えば，「世界（エコ・システム）」の中で，他の事物に対して「身（み）をもって」かかわる能力のことと考えることがでる。

3.「身体的体験」と感性

スポーツや遊びなどの「身体的体験」は感性と深く関係する。何故ならば，先に述べたように，感性とは「世界（エコ・システム）」とのかかわり方の問題であり，これらの「身体的体験」は「からだ」で（つまり，身をもって）かかわることだからである。

例えば遊びは，西村が述べるように，人間の「ある独自のありかた，存在様態であり，存在状況」[12)] である。よって，遊びという活動があるわけではない。遊びはある種の状態であり，その状態になりやすい活動が遊びと呼ばれているのである。例えば「麻雀」は遊びと呼ばれているが，人数合わせのために無理矢理つきあわされたときは遊びという状態になることはない。

遊びという状態は「世界（エコ・システム）」へと溶け込んだ状態である。遊んでいる最中はそのことに没頭し，他のことは忘れ，夢中になっている。矢野は，没頭して遊んでいるときに「いつのまにか私と私を取りかこむ世界との間の境界が消えていくことがある。すぐれた体験はこのような自己と世界とを隔てる境界が溶解してしまう瞬間を生みだす。そして，この自己の境界の溶解がおきるとき，世界はこれまでにない奥行きを表わすことになる」[13)] と述べている。この矢野の言う「溶解体験」は，意識ではなく，「からだ」で（身をもって）「世界（エコ・システム）」とかかわる体験であり，「身体システム」としての人間が「社会システム」から超越する体験と考えることができる[14)]。この「世界（エコ・システム）」に溶け込めることが，遊ぶことができるということであり，それを支えているのが感性という能力なのである。

ではスポーツはどうだろうか。スポーツは遊びとは異なり，ある特定の活動として捉えられる。樋口や西村も指摘するように，スポーツと遊びという概念は同じカテゴリーに属すものではない[15)16)]。バスケットボールは，パス，ドリブル，シュートなどの特定の活動（運動）によって構成される。そしてルールによって制限された状況の中で，多くのスポーツは勝敗を争う。その勝敗を争うスリリングな時間がスポーツの面白さでもある。この「勝った，負けた」も楽しいことだが，それは「社会システム」の中の出来事である。

宮原らは，物事にふれて感じる快感をその質の違いによって「生理的快」「観念的快」「感性的快」の三つに分け「美的経験」を考察している[17)]。宮原によれば生理的快とは，「きもちいい」というような生理感覚上の，動物的個体としての快感である。観念的快とは，一般的な社会通念に照らして「善い」「適切である」「評価が高い」とみなされることにともなう公的な私の快感であり，例えば先のスポーツでの勝利の快感は，この観念的快にあたる。宮原はこれらふたつの「快」は美的体験をもたらすものではないという。そして美的体験をもたらすのは，「きもちい」という生理的感覚的「快」でもなく，社会一般から承認される「快」でもない，感性的快であるという。

スポーツを行っている最中に，「あっ」とか「おっ」としか言えない言葉にならない世界に入り込むことがある。例えば，野球のバッティングでボールがバットの芯に当たった瞬間，テニスのストロークでボールをスウィートスポットで捉えた瞬間，スキーでターンが決まった瞬間，その時に言葉にならない「快」を感じる。あるいはテニスやバレーボールでラリーが続く連続した瞬間，

勝敗のレベルを超えた，清々しい「快」を感じる。それが感性的快であり，美的体験がもたらされるのである。これは「勝った，負けた」という「社会システム」の中の出来事ではなく，それを超越した「世界（エコ・システム）」の中へと「からだ」が溶け込んでいく出来事であり，先の遊びと同様に「溶解体験」であるといえる。

4.「世界（エコ・システム）」とのかかわり方の変容

では，「世界（エコ・システム）」の中へ溶け込むというような「溶解体験」によって，どのようなことが生起するのであろうか。それは，「世界（エコ・システム）」とのかかわり方が変容するのである。その変容をブーバーの「我－汝」関係を手掛かりに考えてみる。

ブーバーは人間が語り得る根源語として「我－汝（Ich-Du）」と「我－それ（Ich-Es）」のふたつをあげ，「我それ自体というものは存在しない，存在するのはただ根源語・我－汝における我と，根源語・我－それにおける我だけである」と述べている[18]。つまり存在するのは，他の事物や人間を「それ」としてみる我（私），あるいは，他の事物や人間を「汝」としてみる我（私），この二種類の我（私）だということである。この「それ」というのは，私が利用できるモノである。このモノとは物質だけでなく人間を含む。「汝」というのは，単なるモノではなく，私と共に生きるものと考えることができる。この「汝」も人間だけでなく植物，動物，あるいは物質を含む。

私たちは，は通常「社会システム」の中で，他者や事物を「それ」として関係づけ，それらとかかわっている。そして「それ」は自己が経験し，利用すべきものとなる。このような「我－それ」という関係は，社会における一般的な関係であり，利害関係と言われるような関係である。例えばスポーツの対戦相手「それ」は操作し，利用し，倒すべき敵となる。

作田はシャハテルの「対象中心性」という概念を「客体への純粋な関心」と捉え直し，対象中心的な関心は対象の全体的知覚を引き起こし，それとともに自己と対象との「溶解体験」が生起するとしている[19]．この対象中心性に相対するところの自分中心性は，客体を自分の欲求を満たす操作の対象とし，利用可能な一側面しか知覚しないが故に部分的であるという。これは先に示した「社会システム」における「我－それ」という関係における我（私）に該当する。対象中心性は，この自分中心性にみられるような利害を離れ，客体に純粋な関心を持つが故に全体的に捉えることが可能となるという。その全体的知覚が生起するときに生命感が成立すると作田は述べている[20]。そして，この対象中心的な関心は「功利主義的関心を超える対象への深い関心」であり，それによって生起する対象中心的知覚によって主体は対象と一つになると作田はいう[21]。

山口は，「我－それ」という関係における我（私）が，「自我中心性を消失」し，「人間が集中してその人の全体が注ぎ込まれ，その事柄とまったく一つになるということ」を通して「自我主観を中心に考える自己中心化」が克服されるとしている[22]。この山口の言う自我中心性，自己中心化の克服は，「溶解体験」を生起させる作田の対象中心性と符合する。そして自己と対象との一体化は自己の対象への埋没ではなく，「主体は客体との関係をつうじて高揚した生命感を経験」[23]し，自己の存在を確認する。この事態を亀山は「『我－それ』関係が，『我－汝』関係に向かって開かれる」[24]と表記するのである。

先に述べたように私たちは通常，「社会システム」の中で，他者や事物を「それ」として関係づけ，「それ」を自己が経験し，利用すべきものとしている。スポーツの対戦相手はルールに基づいて，倒すべき敵であり，同時にボールも用具も利用（操作）の対象であり「それ」である．そこでは「我－それ」関係において「我」が成立している．しかしながら，「世界（エコ・システム）」の中へと「からだ」が溶け込んでいくような出来事によってそのかかわり方が変容する。「ああ」とか「おお」としか言えない瞬間，特別な高揚感の瞬間連続的な高まりが訪れ，試合の勝敗などの功利主義的関心は消え去り，まさに無我，無心でスポーツそれ自体へと没入する。その時，対象中心性が生じ，自己中心化が消滅する。それは「社会

システム」から「世界（エコ・システム）」への超越であり，「溶解体験」である。そしてその時，単なる利用（操作）の対象であった「それ」は，ともにその瞬間を生きる「汝」となる。ここにおいて「我－それ」関係が「我－汝」関係へと変容する。この「我－汝」という関係においてスポーツの対戦相手は，自らを向上させてくれる尊敬すべきライバルとなる。

「我－汝」という関係の代表的なものは，母と子の関係である。子どもは，単なるモノではなく，愛しい存在である。子どもは，対象として「好む」ものではなく，「愛でる」ものである。意識によって客観的に判断し，選択するようなかかわり方ではなく，人間全体として「からだ」中心に，つまり「身をもって」かかわるのである。スポーツという身体的体験を行っている仲間たちも同様である。「社会システム」の中において，互いに倒すべき敵であり「それ」であった仲間たちは，スポーツそれ自体へと没入し，対象中心性が生じることによって「世界（エコ・システム）」へと共に溶け込む。つまり，「社会システム」から「世界（エコ・システム）」への超越によって「我－汝」関係へと変容する。この特別な関係になれるのは，「身をもって」かかわるというかかわり方の変容によるものであろう。桑子が言うように感性とは「世界と自己との相関を感知する能力」であり，このかかわり方の変容のための力と言えるであろう。

しかしながら，スポーツの結果である勝敗，それによる地位や名誉にこだわって「世界（エコ・システム）」へと溶け込めない人たちがいる。高原に咲く一輪の花，何の躊躇もなくそれを摘み取っていく人，その花を「愛でる」気持ちがない。その花は，「我（私）」が家で楽しむために利用できる「それ（もの）」でしかないであろう。この人たちは感性貧乏であり，無感性な人間なのである。

5. ウィーン，プラター公園での出来事

オーストリア，ウィーンの郊外にあるプラター公園は，1873 年のウィーン万国博覧会の会場となった場所であり，1897 年に完成した大観覧車は現在でもウィーンのシンボル的存在のひとつとして市民に親しまれているという。この公園の中に「リリプットバーン」（Die Liliputbahn）という 3.9 km のミニ鉄道の路線がある。元々プラターは貴族たちが狩猟を行う狩場であり，現在でも多くの森が残っている。公園の緑の広場とその森の中を 20 分かけて走る規模の大きなものである。

プラター公園調査時，地元の小学校低学年くらいの団体と乗り合わせた。列車が走り出すと，子どもたちは歓声を上げ，行き往く人たちに手を振る。公園の緑の広場にいた他の団体の子どもたちも列車に駆け寄り，手を振る。踏切で列車の通過を待っていた厳つい姿のバイクの若者も手を振る。何とも語れない，感性が揺り動かされるような時間と空間であった。ウィーンでは，数多くの世界遺産を見学し，調査したわけであるが，振り返ってみると，このプラター公園での出来事が最も印象深く，そして心に残っている。この事態は一体，どのように考えたら良いのであろうか。

W. ヴェルシュは「無感性」という言葉を感性の対立概念として用い，「感性的なものの基本条件―感覚の感受する能力―が廃棄されているような状態」[25] を意味するとしている。W. ヴェルシュによれば，無感性的な諸特性は，社会的・現実的に浸透しており，知覚は，標準化され，あらかじめ成型され，無理強いされているという[26]。彼は旅行者の例をあげ，思い出の写真と観光広告写真が一致していればいるほどその写真も旅行も成功したものと見なされるという。そして後日，訪れた土地がテレビなどで紹介されてはじめて評価できるということがあるとし，「場所それ自身に，それが美しく意義ぶかいことの証明がふくまれているわけではなく，また直接の知覚によってそうした美や意義が理解されうるわけでもない。そうではなくメディアの意味づけによってはじめて，見過ごされていたものが高貴なものと化す」と述べている[27]。そして，このような規格化のうちでは「知覚は確認することへ萎縮」してしまい，「個々人が習得する能力であるはずのものが社会的画一化の道具へと転じてしまう」のであり，「感性的なものが無感性的に遂行される」と W. ヴェルシュは主張するのである[28]。

確かに，プラター公園以外のウィーンの世界遺産の建造物を前にして「おお」というような感動を覚えたことは確かである。しかしそれは，宮原の言う「観念的快」であり，対象に対して「身（み）をもって」かかわることによる「感性的快」ではない。あくまでもその対象は「それ」であり，私が利用できるモノであった。「社会システム」の中における研究者としての立場で対象を観るという行為は，資料やパンフレットによって示された規格化された内容を確認するだけの行為となり，まさに「感性的なものが無感性的に遂行される」という事態であったのである。それに対してプラター公園の列車において，手を振る子どもたちに手を振って応えたことは，それらに「身（み）をもって」かかわった行為であり，その時，子どもたちや厳つい姿のバイクの若者は単なる「それ」ではなく，ともにその時間と空間を共有する「汝」であり，感性的な遂行であったと言える。

ここに感性を教育するという「感性教育」の問題点を見て取ることができる。教育は「社会システム」のなかの出来事であり，「身（み）をもって」かかわる身体的体験が，無感性的な諸特性が浸透した「社会システム」のなかの教育システムにおいて標準化され，規格化された無感性的な遂行へと変貌していく危険性があるのである。

6. 感性を育むとは，どういうことか

感性を育むとは，「社会性」を身につけることとは異なる。そのことを「田植え体験感想文」を例として考えてみよう。子どもたちに田植えを体験させ，その感想文を書くというような感性教育のひとつとしての実践が行われることがある。その体験の後の感想文，A 君「農家のひとは大変だと感じました。あんな苦労をして作ったお米は大切にしようと思いました」。模範的な回答である。教師は「よく考えたね」と褒める。B 君「何か，足がグニャとした感じで，面白かったです」。多くの教師は「そこで考えたことないかな」と，感じたことよりも考えたことを求める。A 君は「こう答えれば褒められるのか」と学習していく。それに対して B 君は「だって，そう感じたのに・・・」と不満になり，そして求められた答えを探すようになる。教師の求めている答えは，社会一般に通用する標準化され，規格化された答えなのである。自分の「からだ」が感じた B 君の正直な感想は否定され，そして「感性的なものが無感性的に遂行される」という事態に陥る。

「体験」とは，その文字が示すように「自分が身をもって経験すること（広辞苑第六版）」なのであり，経験とは異なる。経験は「人間が外界との相互作用の過程を意識化し自分のものとすること（広辞苑第六版）」であり，理性的認識を中心としたかかわり方なのであり，先に論じた「好む」と同じように社会の中のかかわり方なのである。体験はその「身をもって」という言葉が示すように，「世界（エコ・システム）」の中のかかわり方である。「足がグニャとした感じ」という B 君の感想はまさに，その「世界（エコ・システム）」を正直に述べたものである。しかし教師は，「からだ」に基づいた「感じ」ではなく，理性的認識に基づいた考えを求め，それが社会においては正しいことなのだよ，と教えようとする。つまり「社会化」を図るのである。

西洋の理性的認識を基準として考えられてきた感性は，理性に従属する能力であり，「社会システム」の中では理性によってコントロールされなければならない。よって B 君の感性に基づいた感想は，理性によって再認識され，A 君のような感想として完成されなければならないのである。「雪が溶けたら，どうなるか」という問いかけに，「雪が溶けたら，春が来る」と答えた子どもがいるという。雪が溶けたら，水になるのではなく，春が来る，なんと感性豊かなのであろうか。このような子どもたちの感性を育むとは一体，どのようなことなのであろうか。

「育む」とは「羽包む」，「親鳥がその羽で雛をおおいつつむ」「なでいつくしむ」「かばい守る」と辞書にある（広辞苑第六版）。つまり，「感性を育む」とは「感性を守る」ということになる。子どもたちは本来，感性豊かであり，大人たちが「社会化」の名の下にそれを摘み取っているといえる。感性は「育てる」ものではなく「育む」ものである。子どもたちは「世界（エコ・システム）」へ身をもって溶け込む力（感性）を持って

いる。そして，その「世界（エコ・システム）」での子どもたちの様々な物語を大人たちも一緒になって共有することが「育む（守る）」ことにつながる，のではないだろうか。「感性を育む」とは一般的に，子どもたちに対して用いられる言葉だが，感性を育む（守る）必要があるのは，私たち大人なのかもしれない[29)]。

本研究は平成 25 年度～27 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究(C)：課題番号 25350733）を受けて行われたものである。

注および引用・参考文献

1）文部科学省（1998）幼稚園教育要領.
2）初等中等教育分科会（2015）第 98 回分科会配布資料 1-3 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方」に関する審議の状況について，今後の教育課程の在り方について（これまでの議論等の要点のまとめ）（案）（整理中）.
3）桑子敏雄（2001）感性の哲学．日本放送出版協会，p. 57.
4）桑子敏雄（2001）前掲書．p. 39.
5）ベイトソン，G.（2000）精神の生態学．新思索社，p. 586.
6）亀山佳明（1999）子どもの成長と「悪」．香川大学教育学研究室編「教育という『物語』」，世識書房，pp. 71-72.
7）桑子敏雄（2001）前掲書．p. 5.
8）桑子敏雄（2005）風景のなかの環境哲学．東京大学出版会，p. 162.
9）桑子敏雄（2001）前掲書．p. 12.
10）桑子敏雄（2001）前掲書．p. 186.
11）桑子によれば，日本感性工学会が発足する際における「感性」という言葉の英訳の議論において，我が国の「感性」という言葉に対応する英語はないという結論になり，「Kansei Engineering」というローマ字表記されることになったという。桑子敏雄（2001）前掲書．p. 225.
12）西村清和（1989）遊びの現象学．勁草書房，p. 31.
13）矢野智司（2002）関係の変容と関係概念の貧困化．教育学研究第 69 巻 1 号所収，p. 50.
14）「溶解体験」とは社会学者である作田啓一の概念であるが，筆者は矢野が述べるように「非知の体験」であるとし，身体の「無意識」の領域に関わると考えている。詳細は以下の論文を参照されたい。
久保正秋（2015）意味生成としての「スポーツ運動」体験の構造．体育学研究，60(2)，pp. 617-633.
15）樋口聡（1987）スポーツの美学．不昧堂，p. 264.
16）西村清和（1989）前掲書，p. 314.
17）宮原浩二郎・藤阪新吾（2012）社会美学への招待　―感性による社会探究―．ミネルヴァ書房，pp. 311-316.
18）ブーバー，M（1978）（田口義弘訳）我と汝・対話．みすず書房，pp. 5-6.
19）作田啓一（1993）生成の社会学をめざして　―価値観と性格―．有斐閣，p. 88.
20）作田啓一（1995）三次元の人間　―生成の思想を語る―．行路社，pp. 12-19.
21）作田啓一（1993）前掲書，p. 91.
22）山口一郎（2005）存在から生成へ　フッサール発生的現象学研究．知泉書館，pp. 386-387.
23）作田啓一（1993）前掲書，p. 92.
24）亀山佳明（1988）自己変容のコミュニケーション　―G・ベイトソン・ノート．香川大学一般教育研究，33：p. 249.
25）W. ヴェルシュ（1998）（小林信之訳）感性の思考　美的リアリティの変容．勁草書房，p. 3.
26）W. ヴェルシュ（1998）前掲書，p. 74.
27）W. ヴェルシュ（1998）前掲書，p. 75.
28）W. ヴェルシュの用いる「感性」という言葉は，原文では「Ästhetik」であり，桑子の「感性（Kansei）」とは異なる。しかしながら「感性（Ästhetik）」は，古代ギリシャ語の「アイステーシス（aisthesis）」，即ち「感覚から感情までを含み，身体的なものから精神的なものまでを含んだ（有斐閣 認知心理学ハンドブック）」知覚を意味するものであり，「sensibility」の訳語としての「感性」よりも桑子の「感性（Kansei）」に近いものである。よってこの W. ヴェルシュの

「感性（Ästhetik）」に関する主張に基づいた本考察は妥当なものと考える。ちなみに「アイステーシス（aisthesis）」は日本では「美学（aesthetics）」と訳されている。

29）この結論部に関して査読者から，社会的に合意可能な目的提示と手段構築につながる論考を期待された。つまり，「社会システム」において展開されるような感性教育を考察する必要性である。しかしながら本研究の論考では，社会的に合意可能な感性教育は不可能と考えられた。よってこの結論部分では，「育む（守る）」というかなり曖昧な表現となっている。